

特43

166

芭蕉俳諧秘傳抄

附俳諧の葉

全

087347-000-9

特43-166

俳諧秘傳抄

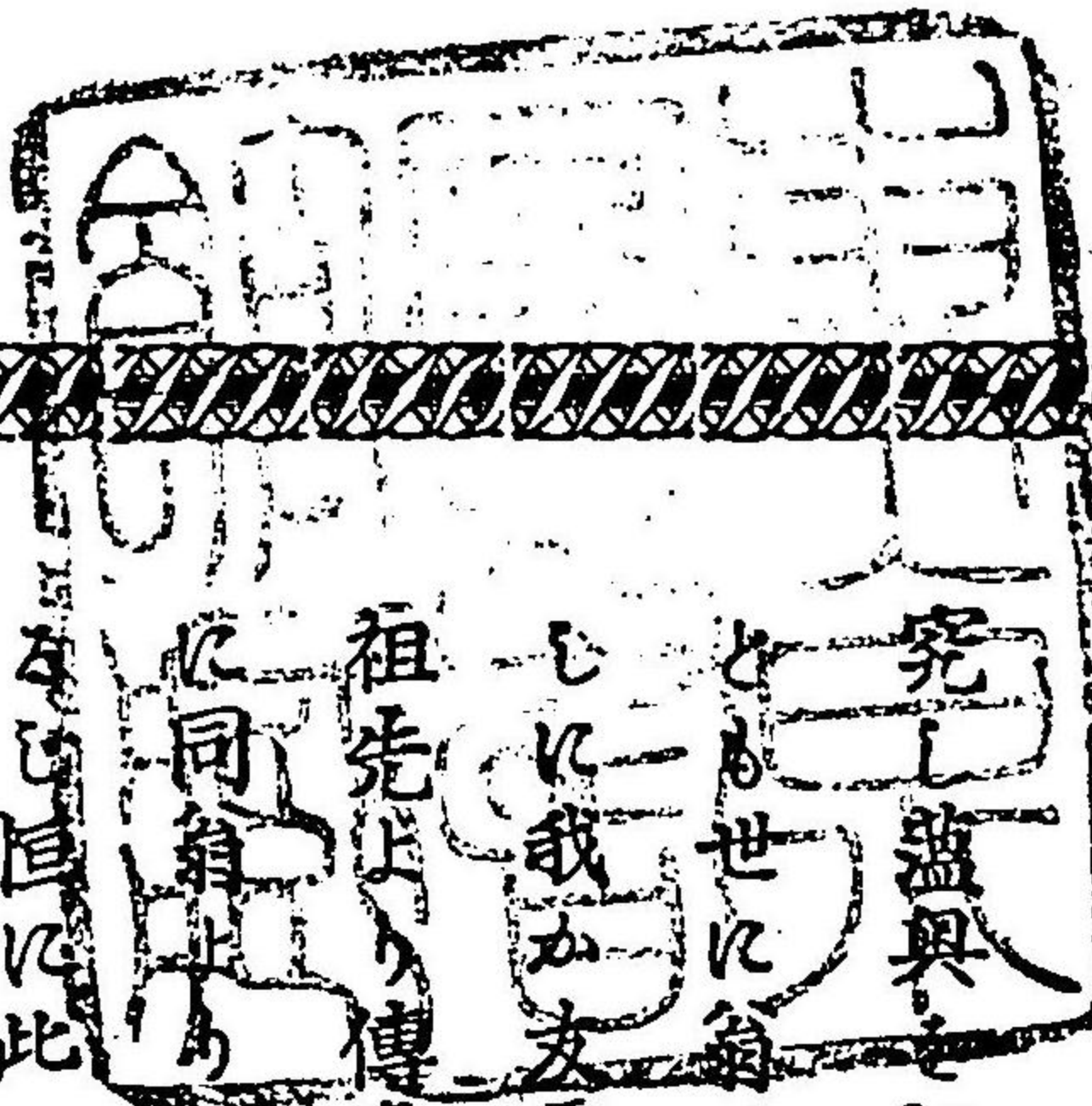
虚心庵 其石/編

M25

DBE-0638







○俳諧秘傳抄序

俳祖蕉翁いこむや像花にあらざる當時の夷狄にひとしく  
 らざる時の鳥獸に類そ夷狄を出で鳥獸を離れ造化にまたかひ造化  
 をかへんと夫れ心を和らげ神を慰そる俳諧に如くいふ斯道を研  
 究し蓋興を極むるの蕉翁が修むる處を修むるより能きいふ然れ  
 ども世に翁が意中の秘を輯め公にせしもの未だ曾て之を聞がざり  
 しに我が友虚心庵のあるは夙に心を斯道に寄せ風雅に姿情を勞し  
 祖先より傳來する處の一秘書あり名けて俳諧秘傳抄と云此書の實  
 に同籍より口授せられたる秘を筆に寫して輯めしものあるよしあ  
 り恒に此ふみを誦み其妙理を學ぶ毎に得る處頗る多しとて予に  
 語りけり、左れど如何に珍藏物なりと云へ既に斯道に有益なる





以上の徒に一人の筐裡に藏め肯て一般俳林に遊ぶ人々の益を謀ら  
ざるの真に斯門の道義にあらざるを以て此たび梓に上せて廣く篤  
志の雅客に頒つ事をおせしよし吾れハ之れを聞きて其真心をめで  
喜ぶこと限あし此書素より叢簡たる小冊子おれども其正鵠を得し  
ハ反て能く累々數千言をあらべしものに勝るあらむと思へり

明治二十五年晩秋

江東の邊にそめる

花廬舎雨笠しるそ

○松尾桃青細小傳

芭蕉菴桃青ハ伊賀國柘植郡の人にして通稱を松尾半七又ハ甚七郎  
忠左衛門ともいへり名ハ宗房後に桃青と號そ同國上野の城主藤堂  
良忠に仕ふ良忠の俳名を蟬吟と呼び季吟の門に遊べり然るに寛文  
六年良忠不幸にして早世せしかハ宗房悲歎の思ひハ堪へず其遺髮  
を高野山に収め國ニ歸りてより頻に厭世の志を催し屢々官を辭せ  
んとするも許されず其後本國を亡命し都のかたへしハ志しのび居  
て季吟の許に遊學し其後江戸に下り深川六間堀に庵をむそびて芭  
蕉一株を植て

芭蕉野分して鹽に雨を聞く夜哉

此句によりて住む所をばせを庵と呼び又人々も芭蕉翁と稱しける



とど貞享元年の秋江戸を發し故園の伊賀に赴く此時「野さらし」紀  
 行あり明年の春京都及大和難波に遊歴し爰に至り京都に歸る元禄  
 二年の秋奥羽地方に遊ぶ此時「奥の細道」の紀行あり夫れより美濃  
 尾張伊勢を経て大津に年を重ね同三年の夏石山の幻任庵に杖を止  
 めて閑日月を樂しみ遂に此處を去て亦京都にかへり同七年の秋東  
 海道をのぼりて伊賀にしろ浪華よりまねく人ありければ奈良を廻  
 り大坂に至りて遊ぶの日たま／＼疾病に罹りて花屋某の後園に卧  
 そ病中の吟に

旅に病て夢の枯野をかけめぐる

これ實に生前の終詠にして十月十二日没を時に歳五十一遺骸は近  
 江國栗津義仲寺(木曾義仲を葬るに葬る)猶此の詳傳送詔の明治風  
 雅集に載そ

芭蕉俳諧秘傳抄目次

上編

- 一 俳諧の道とそる事
- 一 俳諧の二字の事
- 一 虚實の事
- 一 變化の事
- 一 起定轉合の事
- 一 發句に切字ある事
- 一 脇に韻字ある事
- 一 第三手に禁ある事
- 一 四句目輕き事
- 一 月花の事



- 一 花に櫻付ける事
- 一 當季を案する事
- 一 二季に渡る物の事
- 一 發句の時季を用ゆる事
- 一 發句觀念の事
- 一 附句案の様子の事
- 一 趣向を定むる事
- 一 戀の句の事
- 一 切字に句傳ある事
- 一 指合の事
- 一 唐崎の松の句の事
- 一 鶯に鶯の句の事

- 一 宵闇の句の事
- 一 名所に雜の句の事
- 一 假名違ひの事

下編

- 一 十七句法の序
- 一 蕉門興起の事
- 一 不易流行の事
- 一 發句三昧の事
- 一 趣向取やふの事
- 一 句作の事
- 一 附合の事
- 一 發句に切字の事



- 一切字を定めたる事
- 一脇の事
- 一第三の事
- 一習切の事

(附録)

俳諧の琴

芭蕉 口譯 俳諧秘傳抄

東京 月廼本琴秋閑  
全 虚心庵其石編

○俳諧の道とそる事

或人問きて曰く俳諧の何の爲にそる事をやと答て曰く俗談平話をたゞさ  
んか爲めなり又問ふ俳諧の道とそる所を如何と又答ふ佛に達摩あり儒  
道に莊子有て道の實有るを踏破せり歌道に俳諧ある事も斯くの如しと  
知る時と常に及んで道に合ふの道理なり左れとも俳諧の姿に連歌の次に  
して心と向ふ上の一途に遊ふべし

口傳 向宗の事あり

春秋心法獲麟の秘譯

○俳諧の二字の事



我家とは芭蕉翁の自家を指さかり以下皆同

俳諧の二字ハ古来に穿鑿あり或ハ字書を引て俳は非の音ありとも或ハ史記の滑稽を引て俳の字に定りたるともせんさくの理を明かり然れども古今集より俳の字を用ひ来りけれハ此の類ハ故實として錯誤をも其の通りに用ゆる事もあるありハ雲御抄にも俳諧と諧諧の二様ありされとも我家にハ俳諧に古人おしと看破したる眼より玄とも妙とも名ハ別に定むへけれと言語に遊ぶと云ふ道理を知らは我家に今より俳諧の二字も然るべし他門に對して詮鑿をべからそ

○虚實の事

萬物を虚に居て實に働らさ實に居て虚に働らくべからを實を己れを立て人を恨むる所ありたとへハ花の散るを悲しみ月の傾くを惜むは連歌の實ハ虚に惜む俳諧の實ハ抑も詩歌連俳と云ふものハ上手に虚をつく事ハ虚に實あるを文章といひ實に虚あるを世智辨といひ實に實あるを仁義禮智

と云ふ虚に虚あるものハ世に稀にして或ハ多かるへし此人をさして我家の傳受の人といふべし

○變化の事

文章といふハ變化の事なり變化ハ虚實の自在をいふあり黑白善惡と言葉のあやにして黒きを黒しと云ふも黒きを白しと云ふもまばらく言語の變化にして素より黑白一合あり然れハ天地の變化に遊ぶべし人の變化せされハ退屈する本情あり況んや俳諧を己が家にありおがら天地四海をかけ廻り春夏秋冬の變化に随ひ月花の風情ハ渉るものおれば百韻百回に變化すべきことあり變化を知りても變化する事を行なされハ眼前のよき句に迷ひて前後の變化を見ざるが故なりされとも變化と云ふハ新古おき事ハ人間の春秋に新古なきが如し其の日其の時の新古を見て一卷の變化に遊ぶべし變化とハ大むね料理の鹽梅淡く濃く甘く辛きが如し能きもよか



らき惡きもあしからまして時に宜きを變化と知るべし

○起定轉合の事

俳諧は上下とり合ふて歌一首と心得ふべし起とは虚空界に向ひて無念相の内に念相を白まるを發句といふあり一物起る時に對して又生まる之れを脇といふ始めて一物を定むるなり定の字或は請ともあし請の上の一物を受けるありされを發句の陽にして脇を陰あり第三は一轉して天地より人を生まるが如し人の天地より働きあれともあかも天地より出づる所を知るべし合との万物一合なり歌の篇序題曲流の流の字の心あるべし是れより變化して山あり川ありて一卷の成就と云ふあり

○發句に切れ字ある事

發句の切れ字といふは差別の心なり此の物はそれ故に是れなりと埒わちを明けるを云ふ假へは猶客と主人との差別の如くたとへ切れ字ある發句とて

も切れぬときは發句にあらま

桐の木に鶉鳴成堀の内

此句五文字にて心は隔てたるあり切字のとは歌にも詮議あり先づの發句の骨柄とも云ふべし

○脇に韻字ある事

脇といふつかりと字にて留めるといふ初心への教にして定の字に叶へんが爲めあり

いろくの名も紛らはし春の草

うたれて蝶の眼を覺ましぬる

此句の始めて俳諧の意味を尋ねる人の俳諧の名目紛らはしとてまどひたるを其の所で直ちに一棒をあさへて蝶の夢を覺ましむる所一句相對して脇の躰ならぬ字にては詮議なし免にかく脇は發句の餘情氣色の面白



味を附する様にあすべき事を脇の身杯持ちたるはワキの心にあらず口傳に能の事あり發句の客の位にして脇は主人の位なれば已れか心を負ても發句に云ひ残したる草木山川の一字二字の風情を加へて客の餘情をつくまべきなり此脇も蝶の一字よて尋ね歩くさまを見るべし

○第三手に葉ある事

第三の留まりに文字の定まりたる事は一句の脇發句のやうなれとも下のとまらぬ處にて次の句へ及ぼすべき爲あり此の理を知る時はにの字ての字にも限るべからざるべし左れと此句の第三の脇なりと百韻の内にても並び出さ程に第三の脇を去らされは矢張定まりたる留りにて然るべし世にハ韻字留に傳授ありとて或ハ初櫻或ハ郭公おど押字か、ハ字の沙汰あるは知らぬ人の推量なり

かづら 蛭もまた定まらぬ鳴き所

いつれの時か我れも此第三ありしとて一座を戒め他をゆるさしとあり發句とのさかいは此の第三の句字にても知るべし左れと尋常の留りよて事かくまじき事あり

○四句目輕き事

四句めは結前生後の句なれハ殊更大切の處あり輕くと云ふて發句脇第三迄に骨折りたる故あり人の只やり句をるやうに云ひなしたれど一卷の變化ハ此句より始まる故に萬物一合とい註したるなり都て發句より四句めまでに限らざる或ハ重く或ハ輕く或ハ惡く或ハ難く其の句の其の時の變化を知るべし此の掟ハ中品以下の段にして中品以上の人とても此掟の所以と云ふ事をしらせれハ自己の誹諧に暗き人と云ふべし

○月花の事

月と風雅の的なり月ハ月々にあり花ハ四季にありて四花八月とも定まり



たるなりされども名残の裏に月を略する格にて歌仙の時ハ二花二月とも  
そべし表の五句目に月ありてハ裏の八句めに月秋をすると花前の秋季  
もむつかしく秋の植物もまかたし秋季の發句ならぬ時ハ表か裏に月一ツ  
ありてくるしかるまじき事にや此後器量の人もあるべし其れも又一座の  
あひしらひあるべし初心の人ハいか、月ハ七句の花ハ十二句めにある事  
とひたと他人にゆつる時宜なり何國にありても仔細をし凡て月花ハ風雅  
の道理おれハなくて叶えぬ道理を知りてさのみ月花の句に新を求むべか  
らま一座の首尾宜きに附けて置くべし殊に奇怪を好むべからず

○花に櫻附ける事

世に花と云ふハ櫻の事なりといふ人もあれど花といハ萬物の心の花あり假  
へて花智花嫁の類茶の出花深物の花やかあるもともに諸の正花なれば色  
と賞翫の二字に定まりぬ孰れの花にても春の季にして植物に三句去るべ

し花ハ春に發生する物なれハあり古より花に櫻を附ける事傳授ありとて  
初心ハゆるさず或ハ櫻鯛の類を前の花に添えさるものハ附べし花前の  
植物も此の類にてあるべし花ハ櫻にあらま又櫻にあらさるにもあらまと  
云ふ事我が家の傳授とあるへし傳京櫻の事あり

○當季を紫する事

月花の句にも限らま四季の附句に其句を紫する事前の二三句輕き時ハ當  
季を捨て趣向より先づ紫すべし假へて獅子舞と趣向を定て門の花とあ  
しらい長刀と趣向を定てハ橋の月とあしらい前の二三句重きとき尤も  
其の當季より紫して花露月露の類に一句のふりを付くべしされど二ツの  
紫じ方の元より變化の爲あるとをあるべし

○二季に渡る物の事

右ハ二季に涉る物を以後の彼岸と云ひ秋の出がごとりと云ふされども前句



の秋に附ける時を後の字にも及び秋季あり此の類ハ數多あり或ハ節句の二字に名目を附ける時ハ大方植物の指合ありて是れ又前句の季に隨ふべし西瓜ハ秋季によろし牡丹を夏季に在る類あり夏季に西瓜の類多きが故なり星月夜ハ秋季あり月にありて發句に此言辭ある時ハ月の座にて異名の月あるべしみそさゞいと秋の小鳥に入れたれども必そ冬の季然かるべし殊に十月の頃をかし青葉ハ雜あり若葉として夏あり淡雪ハ春季も然るべし口傳新古式法あり虫及び砧の類ハ夜分の心なくしてハ面白からそされど夜分にさし合なし其外ハ此の類にて知るべし此の詮義古式にありし鐘の音砧打とせぬ事あり鐘の音衣打つといふべし左れば能く知りてざるハ一座の働さにもよかるべし

○發句の時季を用ゆる事

或ハ夜着ふとん足袋頭巾の類扇袷ふと尋常に用ゆる物多し平句に在る時

て同季のさし合くるべからそ左れとも一句のさまに隨かに冬隨かに夏と見ゆる句もあるべし此の掟ハ道理のさし合を知て文字のさし合を穿鑿せへからそ

○發句觀念の事

發句ハ屏風の繪と思ふべし己が句を作りて目をふさぎ繪にふぞらへて見るべし死活自ら顯ゆる、物なり此の故に俳諧ハ姿を先にして心を後にそると云ふなり凡べて發句とても附句とても何れも眼を閉て眼前に見るべし心に思ひこかりてそるハ見ぬ事の推量あり眼に見て附けると心に量りて付けるといハ自門他門のさかい紙の筆の上に盡くしかたし諸集の附合を見て工夫せべし

○附句紫ト様の事

發句ハ各句の事あり附け句ハ其座に望んで無性に考案そべからそ我が心







文字の道理は書盡くし難しされは百韻にも三所四所あるへし知らされ  
の言語の道理に落て俳諧に不傳の妙所あり此の執中の二字をさして我が  
家の秘法と云ふへし人よく此の法を工夫せり天下の政治明かに人間朝暮  
の働きも知るを得へきあり

○戀の句の事

戀の句の事ハ古代を用ひそ其の故ハ嫁娘をと野郎傾城の文字見はれても  
戀といふはそ只當句の心に變あらハ文字にかゝるを戀を付まへし此の  
故に他門より戀を一句にても捨てるといへはよし戀ハ風雅の花實をれハ  
二句より五句に至るへし先づハ陰陽の道理を定めたるあり是れハ我家の  
發明にして他門にむかひて穿鑿をへからそ

○切れ字に句傳ある事

切れ字のことハ諸抄に餘多あれとも今の世ハとに推量多し大廻し玄妙切

れおといへる切れ字の事ハ我家にハ詮義をし此の頃の俳書に出でたる證  
句とても如何なる道理とも心得がたし其外三段切れ二字切れなれども今  
の證句ハいかゞ

- 二字切 山寒しころの底や水の月
  - 三字切 子供等よ晝頭咲ぬ瓜むかん
  - 三段切 梅若菜まりこの宿のとり汁
- 或ハ素堂鯨倉の吟に

眼に青葉山ほととぎす初鯉

といふ句ハ明かに目耳口と三段をいへるが梅若菜の句ハ心の三段を知る  
へしされハ二字切三字切ハ句の中にと云ひていかにと疑ひらんとはね  
たるハ三字同意にて切ハ一所あり或ハ

鷹の目の今や暮れぬと鶉鳴



といふ句の字にて押へたれり切字にあらま此類の數多ありて諸抄に  
押字か、へ字の詮義をし切字の百ありても切れぬ事多し或ハ

夕顔や秋のいろくの歌か

と云ふ句の上の夕顔や秋の句續くを切りてハの字にてか、へたれり切  
れ字にあらま此類をほ多かるべし

猫の戀やむ時閨の朧月

これを中の切れと云ふあり閨の朧月夜とハ中に心を殘したる句法ありう  
かりける人をはづせと續けたる歌の類あり

我は家を人に買ひせて年忘れ

これをあいさつ切れといふ一句に自他の差別ある故あり此の二ツの切は  
我家の發明にして他門にむかひて穿鑿をべからま

○指合の事

俳諧に指合の事はあひ草の類に隨ふべし少づゝの新古の事あれと初心  
には上座の了簡にて隨分ゆるまべし一句の好惡を論じて指合の後の詮義  
あるべし指合の變化の道理なれハ先づ其道理を知るべし變化の不自在  
あるより世に指合の掟あり万物の法式ハ此のさかひにてあるべし

○辛崎の松の句の事

辛崎の松の花より朧にて

此發句の落着をこれハ發句と第三と平句の差別を知るなり發句にハ一句  
の中に曲節と云ふ事あり此の句に花ハ曲にして松の朧とハ節あり曲節の  
二ツは尋常の謠淨瑠璃にも知るべし

辛崎の松ハ春の夜朧にて

是れハ第三のさまあり此の句ハ平句よりハ重き所松の朧といふ事なり  
からさきの松を春の夜見渡して



是れハ只春の氣色のみ曲もなく又節もあきものあり此の發句を世間にと  
まるとまらぬと云ふ沙汰あれともそれハ初心の人の論なりされハ臆哉と  
あるべきを臆にてと云ふ句作りかなは結定の言葉にて花より松か面白さ  
との結定あり左れば片題の褒貶のがれがとし歌にも又嫌ふとなり  
さ、浪やまの、入江に駒とめてひらの高根の花を見るかかと讀みける其  
花よりも平崎の松臆にてと但面白からんと不結定の中に結定せしあり或  
はにて留るの事

三日月ハ正月はかり誠にて

此のにての心に去るべし月ハ月々の三日月あれとも正月はかりハ誠にて  
あらんと結定の心を残したるなり尤もにて留りの事ハ二留の發句の第三  
にも仔細ある事をも知るべし

○鶯に鶯の句の事

むかし武州の深川にて鶯に鶯の句付たる事あり其時も知れる人稀なれハ  
今更附合の格式ともいふべし

誰の柵に鶯を詠めて

鶯の居る花の賤か屋とよめりけり

是れハ前句の云ひとりや歌の前書と見たるよりかくハよめりけりと付た  
るあり此類ハ前句の心を發してこたえよりいひあしたる他物比興といふ  
物なり或ハ前句を軍書とも能狂言のおかしみとも淨瑠璃おどの拍子とも  
聞おしたる風情あり

番匠か根の小節を挽き無て

片元山に月を見るかな

是れハ前句の五文字より古代の歌のさまを聞をして月を見るかなと歌に  
よみたるあり哉ハ平句の哉にかきらむ此類ハ皆々仔細ある事なり模様を



好み奇異を求めての必ずあまじき事なり

○宵闇の句の事

有明歌仙裏の七句目にて宵闇の句出でしに三句の中に月をこめたるあり

宵闇のあらふる神の宮廷し

北より萩の風そよきたつ

八月の旅面白く小幅綿

尤も宵闇の月の附けがたし打越に殊にあらし十句めは花前にのひて無念おれに三句の心に持せて八月のくつづの字にて見渡し月の字をあしらひたるあり是れを一座の揃ひといふ宵闇を月と思ふまじきあり三句とり合ふて月の字の働とあるへし

○名所に雑の句の事

名所の發句のまべて雑の句も然るへし名を云ふ季を云ふ時の爲めに作心

かたやかあるまじ

朝かさを誰か松嶋の片ころ

からあらば杖つく坂を落馬哉

かたつぶり角ふり分よ須磨明石

此須磨明石の句の蠻觸の兩國をたとへ其はい渡るほと、いへる辭より思ひ寄せたれのかからずしも蝸牛の當季にもか、はらそ是れ等を雜躰と云ふて名所の句の格式となるべし  
年々や猿に着せたる猿の面  
といふ歳旦例句あり

○假名遣ひの事

世に定家の假名遣ひといふもあれともあまり事しげき故に紛て知れ難しむかしの假名遣ひの詮義もふけれと其後の事おれに大概まりて埒の明く



事ありされど俳諧にのさむふもあつふとも書くありさむうあつふと書さ

てハ假名書の經文見るやうにて悉し此類ハ心得置くべき事あり  
(い) イキッ 鯛鯉の類 (ひ) フヒへ 葵雞の類 或ハひゐふともひゝなとも此の類ハ  
假名の序書と云ふべし

(を) をんか 山をろし 小桶 (は) の字をの字ト同じ

(お) おとこ おろし 桶 緒を 小を おの字ハあたらず

(大) 尾ハ おの字ハあたらず

(そ) (は) 同上下に用ふ

(ま) 上に用ふ、三輪の時下に用ゆる事あり

(系) 聲 棺の類又さへとも此時ハ末の字の心あり

(え) 中のえ 消きへる 杖 笛 机 此時ハ技と云ふ故實あり

(へ) 是れハ「ハフヘ」に通む 榮 へ 是れハ故實ありあへ物の

類あり 縁 えん 此類あり 更衣 の事ハ フへの口傳 あり 不働類あり

手アライ共 紅ベニ ヲ共 住居雲のたゞさまひ 山の冬さまひ 法師 ホツシ ホツ

とハ故實あり 入 雜サツ 拾セツ 此類をへて入聲

(ち) ところの類ハ通ざるハちの字あり

右者俳諧之新式有二十五箇條尤為我家之節目也即於落柿  
舎自書而與去來見之識之可明自己之俳諧不可傳與他人尤  
道之尊重也

元録戊辰六月

芭蕉庵桃 青

芭蕉俳諧秘傳抄上編終



○十七句法之序

發句と云ふは歌の上の句にして爾かも一首の心を無備する故に句中に法  
おけれの句とならそ此故に詩文に躰格と云ふあり歌にも五義三体といふ  
ものあるがことしされの連俳の先達歌の十躰三十躰に習ひて發句附句共  
に一躰を別ちたれとも末句讀の法を今や詩歌の古格を正し十七の句  
法を定めて規矩とせるものからし

挑 青

一字褒貶 古池やかのを飛込む水の音

一聯二句 花の雲鐘の山野か淺艸か

觀音のいらか見やかつ花の雲

換 骨 頓て死ぬけしき見へき蟬の聲

雙 關 かたつぶり角ふり分よ須磨明石



結前生後 夕顔や秋のいろくの歌か  
 影略互顯 筆に出て奈良と難波の薄月夜  
 句 卯の花やくらさ柳の及ひ越し  
 閨 鹽鯛の齒くさも寒し魚の店  
 寂 物いへの唇寒し秋のかぜ  
 挽 此あたり目に見ゆる物皆涼し  
 草 景清も花見の座に七兵衛  
 行 道の邊の木槿の馬に喰れけり  
 真 象瀉の雨や西施か合観花  
 無心所着 いきたらに雪見にころを所なり  
 摸寫變態 田一枚植へて立さる柳か  
 宛轉折旋 先祝へ梅を心の冬籠

○蕉門興起の事

枯枝に鳥とまりけり秋の暮

古代の姿あらりからそのあつれと云ふへし中古の姿あらばからその枝と云ふへし正風体の誰ありの場にて作るべし

○不易流行の事

風に二日の月の吹散か

万世不易と日々流行を知るべし尤も表裏の變化と新古の差別あり

○發句三昧の事

さるみの初時雨猿も小箒をほしけなり

炭たのら梅か香にのつと日の出る山路かな

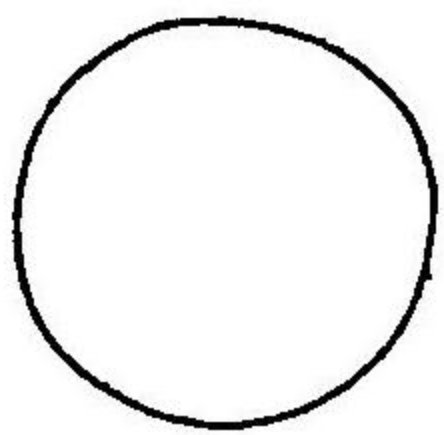
續さるみの八九間空て雨降る柳か

和歌三体を本として蕉門三集の姿あるべし



顏曾二子の論

貫旨自得妙



○趣向取やうの事

趣向と云ふは題の事にはあらそ月雪花時鳥に一つの趣向を合せて發句一章といなるあり夫れ心の自在にして六合にたり萬物に止まる此のた、ままひを思慮して風雅の二字を志るへからを此故に詩文に文質を別ち歌にて花實相應を本とを併も尚ひとしかるへし唯花月に耽るへからそ人情の教戒となる事を知るべし

人所器 口傳

○句作の事

木の規矩に就てハエの攻むるにあり句の成就も又同じかるべし先つ一物を生して是れを切瑳し句ひ闇ハ句の餘情にして無分別の場にて作るべし

朝夕に手入れし菊や名取川

撰捨て手入れぬ菊や名古屋山

四番めに手入れし菊や一の關

一二三 ○附合の事 口傳

前句ととくと付ける事を習ふべし付ける事を志らば打越の輪廻三句の渡りを心得て一句くはたしかに付る事を知るべし

一前句に足を踏込む場

跡付の小口をかゝるいそかしさ

雪隠にゐても返答を打つ

一能場



敵よまるかと村松の音

盃に母の涙をほじかねて

一千眼一到の場

二階へとつて上る行燈

さんみつに仕切を渡り肥前船

初 中 終 口傳以上

○發句に切れ字の事

歌に上下のありて天地を別ちたるあり連俳の發句に則ち歌一首の姿心を込むる故句中に切字を入るゝと知るべし

切字と云ふ口傳 干結反 妻結反

○切字を定めたる事

先達百十九の切字を定めたるに問答ある詞と治定の詞とあり此故に治定

の手に押字か、へ字の習あるあり

○脇の事

脇の字留にせよと云ふは是れも歌一首の如く一句の詮立てんる爲あり然れとも發句に能つかひて一首のとくにあるを脇の姿といふなり此のさかひを知へし

○第三の事

第三の發句にあらま平句にあらま一句の仕立に習ひある故にてらんもなしに此の四ツの手にはを定めたるなり尤もらんの手押字もあしに二義に留のあつかひ等をあらふへし

附應辨

付句と云ふは總名にして避ける場ありかゝる場あり此の二ツのもの前句の濃薄より出てしかも自由の始めに立つものありされは蕉門の教に心



景氣のニツ皮肉骨のニツ七情をわかち三十六條の姿を顯し付句の本情を演へたるあり是れ附合の關にして此場を知らざる作者へんくいの一歩危かるへし○晉子曰付句につくる所は付けても又我が句に又人の付けよからんやうに句作るへしと云へり是れ一句一物に限らぬやうにせへしと云へり

宿札に假名付したる醫者あれや

と云ふ句の醫者のみに限る故に付ける句をまり付けされて飛過さにあるあり是れをいこ、

宿札に假名付けしたるといれ顔

とせし何ものにもわたる故に付けよかるへし又醫者にて付けたる句あらば其句作あるへし他準之

八躰の附方

寄

大八のまりくまじる藥研坂

女子の供につきし羊寄

志

朝茶をそゝる疊屋の弟子

臺所に百兩包みちらしおて

觀想

雁鴨の群ある中に驚も居て

成るやうにふる身の上の秋

前句の情をpush出ま句

何事も心に持て打轉ひ

今にくわたく御氣の部屋

欺

大小さして杖突て来る

女房さへ去て除たき世の中に

打かへし

三尺に餘る刀をさしこゑし



露を吞たる顔の赤さよ

意 氣 出替りに目をやる迄のいとま乞

味噌の煮るかとお大わめさきる

宿札に假名附けしたる醫者おれや

七ツ過れし霞ふるあり

五ツ過れし霞やむあり

醫者のみに限りたる句又前にひし／＼と付たる時斯の如くにて然るへし

七ツ五ツといふにて何となく醫者に寄るあり

さつと降てし霞やむあり

此の如くに作れり百句にそむかず一句は據おし是れをよく差出さへし是を中より行く句と云ふあり

總て附句といふに付りなして後兩句婚して附合のきら／＼と見ゆるを上

と云ふへし

○習切の事

大廻し 一圓相口傳

あふとうと春日のみかく玉津嶋

引 歌 久かたの光り長閑き春の日にまづ心なく花の散るらん

を廻し 青くても有るへきものを唐辛

薫よさへ福の名あるを門の松

春過ぎて稱いもは賣をほとゝさそ

況んやと云ふ口傳 大小對と云ふ口傳 自問自答の口傳

三段 三名切

今朝の雪庭の木に餅岩に花

目に青葉山郭公えつ鱧







連歌俳諧の歌一首の上の句下の句を二句に分ちてきるあり

連句の上の句に下の句を付け下の句に上の句と段々に附けるあり

歌仙の三十六句百貫の百句きるあり

發句とい一座の巻頭初發の上みの句に春夏秋冬等其の時々の季を入れ切

れ字を入れやまらかに句作るべし四の詞並に切れ字入れやう品

々の發句あまた末に載るよく味ひまらべし

脇とい下の句に發句と全し季を結び發句の心をよくうけて文字留りに

まべし但し時候遅速といふ事あり遅速といふをしはやしとい

ふ事なりたとへ彌生の發句に正月の季にていつかす正月の發

句に彌生の脇もあろし正月の季二月の季二月の季にてまべ

し

第三とい上句の句にて脇へしかくつかすとも一句のさけ高く發句の躰

にあらざるやうに三月あわさる季にてまべし

三つきにあたる季とい正月より三月迄にかよふ季あり四季共

全斷

四句目雜の句なり雜とい季のあまき句をいふあり

五句目月の定座なり月の句をまべし月の秋にて此の次秋二句つけて秋

三句つゞくべし

六句目秋これ迄を初表といふ此の内神祇、釋教戀、無常、迷懷等の句

をせず

あけ句佛とも巻軸とも云ふ歌仙百韻等終りの句なり花戀の花あらばあ

け句も戀あり神祇の句あらば神祇にまべし餘の準之

句數月花の定座等末に委しく記るまべし

歌仙句數法



初表 六句内五句ノ月の定座六句メ八月こぼさむ

初裏 十二句内七句ノ月十一句ノ花十二句メ八月こぼさむ

此十八句を一折といふ

名残表 十二句内十一句ノ月

同 裏 六句内五句ノ花是れをにほひの花と云ふ

此十八句も一折にして二折合せて三十六句なり

百韻法

初表 八ノ句内七句ノ月

同 裏 一折十四句内九句ノ月 十三句ノ花

同 裏 一折十四句内九句ノ月 十三句ノ花

三ノ表 十四句 右同断  
同 裏 一折十四句 右同断  
名残ノ表 一折十四句 右同断  
同 裏 一折八句内七句ノ花句ひの花也  
此裏月おし

右四折合せて百員なり初め二折を五十員と云

四十四法

百員の初折と名残の折と合せて四十四句あり此二折に月三ツ花二ツ法百

員の如し

七十二候

百員の初折と二の折と名残の折と三折合せてるあり此二折に月五ツ花三

ツ法百員の如し

源氏法

初表 六句内五句ノ月

同 裏 十二句内七句ノ月 十一句ノ花

同 裏 十二句内七句ノ月 十一句ノ花

同 裏 十二句内七句ノ月 十一句ノ花

米字 八十八句

初表 八句内七句ノ月 十一句ノ花

同 裏 十二句内七句ノ月 十一句ノ花

同 裏 十二句内七句ノ月 十一句ノ花

右四折に月七ツ花四ツなり

上記三折に月五ツ花七ツ歌仙の法の如し歌仙に二の折廿四句添へたるものなり

三ノ表 十二句 右全断  
同 裏 十二句 右全断  
名残ノ表 十二句 右全断  
同 裏 八句内七句ノ花



首尾

歌仙初表名残表 六句 五句ノ月 合せて十二句を云

百員初表名残表 八句 七句ノ月 合せて十六句を云

裏白六句ハ句カ 表斗りを云 面白十二句ハ句カ 裏斗りを云

三ツ物 發句、脇 第三まで三句を云

月 發句か脇か第三かに出でたる時ハ初表の月出さそ

花 發句か脇か第三かに出でたる時ハ初裏の花をせそ梅か櫻を花の座に

まべし

但し正花ハ第三迄ハまべし四句より初表の内いだしそ

發句

一總ならわ脇も總てまべし 一釋教あらむ脇も釋教よし(有り無し) 一裁留りの時ハ第三ふて留めすべからま(口傳)

連句 どの歌仙并に百員等の事なり

打越嫌 どの付て苦しからずして二句隔つを云

二句去 どの付句より二句隔つをいふ

三句去 どの付てハくるしからずして三句隔つをいふ

字去 どの付句より三句へだつをいふ

五句去 どの付句より五句へだつをいふ

衣季や竹田の船ち夢涙月松枕煙五句さる

此分折面かハりても五句去あり

七句去 どの付句より七句へだつをいふ

面去 どの百員八面の一面をへだつをいふ但し表も一ト面裏も一ト面と云ふあり表裏のたもてにあらむして見えたす一ト面のとあり

折去 どの百員四折の一ト折をへだつ事あり

一ツ二ツ四ツハツこの品々輕重によりて百句にいくつと云ふ數あり

訓に四有るものハ音にも四ツ有るあり百丁方の如し訓音替りてハ而去なり



名所國名在名等或ハ官名苗字人の名おとに呼とさハ名所にあらを水邊山類にあらをそれハの躰を遁る、あり

時々の草木菓旬段食物になれハ其の季ハ持ちなから植物をのがる、あり魚鳥獸等も食物になれハ其の季ハ持ちなから生類のがる、なり紋所或ハもやうのしおハも季ハ持ちなから躰ハのがる、あり

釋奠春二度あれとも春後といハハ秋 蔽入春二度あれとも春後といハハ秋

雖三月二度立れとも春後といハハ秋 峯入順春逆秋二度あれとも峯入と斗りハ

秋古代より初表の内嫌ひ来る物の中に古人の名の事聖賢公家武家或ハ歌人儒者醫師町人百姓職人等の神祇釋教戀無常述懷衰傷等にならざる古人の名表の内苦しからそ尤在るが如くまべし同名所の事神祇釋教戀無常述懷等にならざる名所國名町名等表の内苦しからそ旅体右同斷

野々口立甫夜話云七十二候花信詩抄等之季併諧に取捨ある事を詩歌を

引も同断七十二候に螻蝻鳴ハ夏詩に鳴蛙秋にあれとも連併ともハ春なり和歌に牡丹春花信に棟春これ等を連併にて夏なり此列をしらそして詩歌候を引き或ハ詩書等にて異様ある季を見出し併諧を錯亂まべからむ餘興の事古采ハなき事あるを何の頃よりハ百員の舉句に發句あらて常の折ハなる如く句を繼て表八句裏十四句月花并去嫌等常の百員の法式少も違ハハして百員結ひ次て續二百員或ハ續三百員と呼ふ也百員ハ一句の物も餘興にハ又出てむ

但し餘興うつり二句去三句去の物ハ式に去五句去七句去面去折去物とホし三句去にてきるなり

○發句切字の事

切れ字になる分

哉 や ど か よ めり たり けり さぞ たぞ たれこそ な



にかい いく いざ かも そも けれ らし らめ らん 見ん  
せん けん いづれ いかい いかい いづこ さぞあ かしあ ちら  
し けらし もあし あり あり 花咲きぬ等あり 雨ふり 下知 舞へ開けさせ立て 等あり  
現在のし 晴し等なり 末采のし 花咲へし雨等あり ふるべし

二字切

折る人の花に恨「ん風もな」し

三字切

「いかに寝て」何いふ事」ぞ星の中

三段切 三名切とも云

世帯男の衣裳うつらの尾

大廻し

手に乗せて富士の雪見る遠眼鏡

を廻し

青くてもあるべきものを唐辛

玄妙切

窓白し雪や障子を張つらん

右の外切字あくて切る、句あり師傳あくてのきべからむ

切れ字にあらざる分

ふのぬ 咲かぬ 散らぬ 等あり 過去のし 咲し 散し 等あり ある あく たる ぬる あ  
る ける

右の類みあ切字にならざとしるべし



附錄俳諧の栞終

○第壹回精撰發句集撮評披露

月廻本琴秋宗匠選

(題)四季混題

(寄集句員千七百五十余章)

感吟

(順列)

(天) 月花の夢の覺めけり初時雨

筑前國御笠郡大野村

菜花園蝶夢

(地) 城あとの只名のみふり枯尾花

讃岐國温泉郡松山

一夢庵昉玄

(人) 逆らぬ人に怪我おし風見艸

東京小石川久堅町

蜀人

十印

番外十客

もの云こゝさぞお嘆かん秋の蝶

周防國佐波郡三田尻

松齡庵翠月

あほがる、身を羨むな絹團扇

遠江國敷知郡濱松宿

萩のや主人

頑是あさ子の行末も清水哉

信濃國評訪郡上スワ町

曙亭東白

下駄音に數へ無ねけり霜の鐘

備後國御調坪尾ノ道

蕉雨

盛りとの散りかゝる日の櫻哉

陸前國塩釜港

無望



柳の齒にかゝる抜髪や秋の風

遠江國敷知郡濱松宿

貞

海

元日やおおし浮世の内おれど

大坂市東區高麗橋二丁目夜

鶴

寝る愁も孝に忘る、故遣かお

上野國東群馬郡前橋

山中 藤枝

野に山に心済さけり春の人

長門國赤松ヶ関中の町

一二庵三四

砧うつ人いゝならん夜の雨

東京北豊島郡下駒込村

田中 艶子

七印 番外四十客

君が代や朝日に匂ふ菊の花

徳島縣名東郡富田浦町

静洲庵 鶯林

先づ無事に歌を連れて竹の春

肥後國熊本市塩屋町

玉泉堂 鏡月

抜き無ぬる仕舞の風呂や虫の聲

尾張國名古屋本町

勝 雄

白砂に松の黒繪か小春風

羽前國西置賜郡長井町

雪の舎 笑鶯

ねむみ取る玉風をこらそ夜長哉

近江國滋賀郡坂本村

豪 雨

袖垣を越え氣も抜けて秋の蝶

三河國西加茂郡華母村

巴 水

襟折りてあらぬ羽織や羊の人

長門國阿武郡川島村

斯 石

隅田川や今戸から引く夕かきみ

東京元金杉日暮村

隱世 閑人

山茶花や人の眼につく住ひ向

周防國大島郡小松村

杏花亭 樂園

ふいと見る鶴や子の日の遊ひ先

秋田縣鹿角郡柴平村

松月庵 七五三

巨燧から戸を明けさして冬の月

石見國瀨戸郡大國村

秋景庵 千金

寒むそらに歸る鳥あり夕時雨

羽前國西置賜郡長井町

中島 眉山

戸尻から渡る、月や虫の聲

武藏國川越大字相生町

稻 友

八束穂の出来や我田にあらねども

釧路國原岸郡太田村

千鶴樓 万亀

日影行く人や日傘を持ちながら

出雲國意宇郡松江本町

望 涯

近道へ未だ濁りけり梅の花

備後國沼津郡鞆町

鞆 杖

人の道知らぬ浮世の紫山子哉

東京市本所區小梅町

し づ 杖

駒下駄の痕も内輪や萩の庭

下總國千葉郡寒川村

老梅庵 古城



其親のしつけも見ゆる晝寝哉

渡島國松前郡吉岡村

卧雲堂仙居

こびれたる所も見へむ今年竹

大和國御所町

醉雨

樹の中を白帆のくゞる枯野哉

下總國東葛飾郡梅郷村

梅郷學人

身の方を知るか牡丹に眠る蝶

筑前國御笠郡大野村

菜花園蝶夢

春行くや塵もそらぬ玉くしげ

全國遠賀郡山鹿村

松翠

虫の音もあれや嗟嘆の陀住

信濃國東筑摩郡塩尻村

万巻樓主人

しほり戸に人影立てり朧月

伊豫國温泉郡小唐人町

春秋園吟香

ほめながら雨戸閉めけり冬の月

羽後國山本郡能代港

翠嶺堂知春

柿一つ枝に残るや秋の暮

京都市西洞院通り

月丸

名月や襟にひやつく樹の雫

播磨國赤穂郡高田村

松林堂海壽

燕やこゝにさかへる三代目

東京芝櫻田本郷町

梨棧甚

うるむ眼に見上る空や渡る厂

茨城縣那珂郡中野村

徳明

旅ひとり心細きよ秋の夕

東京芝櫻田本郷町

梨棧甚

くれないに小指をむれば郭公

出雲國意宇郡松江本町

望涯

重なりて落ちても桐の一葉哉

羽後國仙北郡角館町

牛歩

各月やみやこに勝る野の景色

上野國西群馬倉賀野仲町

智水

澆季なる世をかこちけり楳の主

東京淺草區七軒町

夫狗居士

蟲の音も白し艸葉にやどる月

根室國根室松ヶ枝

竹林堂逸齋

花足袋や智慧も形ほど憎らしき

大坂南區谷町筋五丁目

いろそ

里の田の話しにふけて遊團扇

群馬縣東群馬郡前橋

藤の本可洗

蛤とあらぬ果報や稻雀

新潟縣中蒲原郡矢代田村松鶴園泉舎

越せと云ふまゝめありけり年の坂

陸中國東磐井郡大原驛

希聲

(以上他に五印の部數十句撰抜あれども賞與に關係あきを以て之を省く)



○軸

平らけき御代や八千代も幾久の花

判者 琴 秋

みやびかの友をあつめて花の庭

催主 虚心庵其石

○投吟諸君へ謹告

一此披露の俳諧の葉に載せべき處斯くてハ一級の投詠諸彦へ何の閉巻始末を報知せざる様相成甚た遺憾と存じ爰に分離して投吟各位へ一々配布する事となしぬ。

一俳諧秘傳抄の儀豫約満期とあり普約通り絹糸綴の美本出来夫々豫約諸氏へ發送済の處殘本少々有之に付今回の出詠諸君に限り此際從前の豫約價金廿五錢にて即刻送本可申候 但郵卷代用の必も三割増の外謝絶

そ

◎第貳回課題精撰發句東京大會

東京 其角堂機一 兩宗匠大選(題)四季題意 締切未廿六年一月十日限り延期なし ●製

郵税等として入式三句迄拾五錢。以上一句毎に貳錢宛○返艸を要する方

ハ別に郵税御添付の事○領收証ハ葉書代壹錢 ●清記及冊子發送ハ皆詠艸到着順に付至急御投詠あれ ●賞與——兩評共各秀逸金剛時計一個以下合

計百廿客迄順次大景贈與。但他會の如く集句高の豫定より少數たり共決して賞品を變更せま ●撰評濟(一月下旬)の上ハ賞與を送り其撰拔秀句及

實名俳名住所等ハ第二回明治風雅集(扶吟者外賣價卅五錢)に掲載し二月上旬必も投吟各位へ無代價二冊宛配送をべし。尤も撰拔の有無に係らそ出吟者の一句ハ必該集に蒐載を ●本集ハ彼の無價値無趣味極まる互撰



集冊と大に異り斯道に關する論說叢話隨筆歷史傳記考証問答批評新報等を毎編掲載するに付投吟諸君に限り御投稿隨意なり◎注意 本社中此種の會合中最せ公正明實ある者にして毎回毫も誓約を愆り中止延期其他不始末あきり諸君及東京新聞の是認する所なり他の銅具射利的偽風流者の無責任なる催と全一視勿らん事を望む。

今回初回あるにも係りらる全國雅伯より御投寄の芳吟意外の多數にて社中の面目之に過きを之れ一に真正風流(銅具的風流に非を)を重せらる、諸君の御受顧の外ならまると社員一同感謝の至に堪へを候依て自今益々奮て斯道の爲めに紛骨碎身盡力可致に付て次回より大改良を謀り凡て他會の及ばざる特色を著し且つ嚴正ある社規等を細定(風雅集に詳録せし)以て諸君の厚意に酬ゆるの準備皆整致候間次回も不相變陸續御投詠あらん事を希望す。

○第一回投句者併名列記表

羽後	北	林新瀉	誠吟庵松翠	陸前	無	望渡島	臥雲堂仙居
攝津	白	崔羽前	雪の含笑鶯	信濃	鳶北庵秋月	札幌	風品女
徳島	靜州庵	鷺林齋岐	隗始庵蛇影	遠江	貞	海全	遊水
岩代	篠田	鶴村埼玉	大澤	靜幽全	柳亭	湖翠大和	醉雨
阿波	南	疇近江	豪	雨出雲	望	涯札幌	笑齋
遠江	萩のや主人	志摩	獨樂園一歌	東京	天狗	居士美濃	孤陵園玉塔
肥後	玉泉堂	鏡月	信濃	曙亭	東白	埼玉	優
千葉	不鳴亭	黙雷	羽後	羽	川備後	鞆	杖下總
越後	覺戀	坊駿河	壽	仙東京	しづ	技筑前	菜花園蝶夢
周防	松齡庵	翠月	三河	巴	水新瀉	忍月軒	北雪後志
越後	相思	軒長門	斯	石神奈川	自由	庵播摩	松林堂海壽
尾張	勝	雄備後	葛	雨下總	老梅庵	古城	上野
野州	蘭	蹊鳥取	花都舍	春海	札幌	可	同渡島
							湖月庵一葉



岩代	仁	風下	總可	友後志	中西	定一	札幌	松	友
岐阜	鶴	聲	富山	梅	香速江	光	友石	狩	北霜庵正眉
豊後	推	進	機	越後	錦園	桐陰	信濃	曙亭	東白陸興
東京	梨	機	甚	豊後	山	本遠江	光	友	神奈川
千葉	梅	壽	山	梨	蟠	龍紀伊	靜々	庵	一望
全	嵐	山	三	河	竹	雨	三	河	凌雲亭
筑前	井	水	美	濃	小栗判三郎	能登	呈仁	館	南水
伊豫	清涼園	夕雨	神戶	晴松亭	一囚	全	鳳珠	庵	其汀
愛知	鶴	齡	上野	八蜂堂	晁月	播摩	無滌	庵	清水
茨城	德	明	信濃	仙	笑	武藏	梓	周防	朴
長門	一二庵	三四	五	越前	觀	月	東京	春	水
岩手	如	流	下	總	其月	庵	知節	肥前	緒方
信濃	不老庵	仙室	備後	布留	の	屋	月	尾張	假菴
東京	田中	艶子	讚岐	柳塵亭	弄	燕	肥前	芝	山羽前

武藏	稻	友	伊豫	秋春園	吟香	東京	田	蛙	伊豫	浮龜軒	鶴笠
丹波	鶴樓堂	葭涯	下野	秋菴	靖州	周防	錦	水	堂	京都	待
北総	夢中庵	喜樂	羽後	翠嶺堂	知春	全	露	月	紀伊	聽松庵	霞仙
信濃	水近園	柳壽	京都	月	丸	出雲	宿雲	居	斐水	羽前	宮
劍路	千鶴樓	万龜	佐賀	善寶亭	月舟	上野	智	水	陸興	松洞舍	蟻角
信濃	松月菴	蘭水	全	龍	吹	若狹	一	夢	庵	世	上
筑前	松	翠	上野	山	中	藤枝	群	馬	鶴	陵	越後
千葉	香取	寅	松	周防	飯	袋	子	羽後	梅	吉	武藏
信濃	万卷樓	主人	武藏	大澤	玉淵	羽前	中	島	眉	山	伊豫
大坂	い	ろ	こ	羽後	牛	步	越	中	希	聲	石見
山梨	桂	水	駿河	東竹軒	迂	暖	全	蟻	仙	信濃	喜樂庵
群馬	藤の本	可洗	攝津	梅	軒	長門	月	雪	全	花	花
山口	金	石	讚岐	一	夢	菴	玄	昉	全	玉	露
新潟	瀉	自	由	越前	木	久	全	氷	玉	甲	斐



北見	文雅
大坂	光霽庵風月
美濃	風柳
周防	雅樂閑昇月
三河	月延庵昇
全	五明亭三友
能登	山外
長門	梅下
能登	惠日菴山品

全 明治二十五年十一月八日印刷  
 年十一月十日出版



編纂者 尾關則光

東京市本郷區森川町壹番地

印刷者 田口高朗

東京神田區猿樂町一丁目五番地

印刷所 金玉社

東京神田區今川小路三丁目壹番地



